

# 2022年 11月6日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「隅の親石」 マタイによる福音書 21章33-46節 高橋彰

## ◆「ぶどう園と農夫」のたとえ

21 33「もう一つのたとえを聞きなさい。ある家の主人がぶどう園を作り、垣を巡らし、その中に搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。34 さて、収穫の 때가近づいたとき、収穫を受け取るために、僕たちを農夫たちのところへ送った。35 だが、農夫たちはこの僕たちを捕まえ、一人を袋だたきにし、一人を殺し、一人を石で打ち殺した。36 また、他の僕たちを前よりも多く送ったが、農夫たちは同じ目に遭わせた。37 そこで最後に、『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、主人は自分の息子を送った。38 農夫たちは、その息子を見て話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺して、彼の相続財産を我々のものにしよう。』39 そして、息子を捕まえ、ぶどう園の外にほうり出して殺してしまった。40 さて、ぶどう園の主人が帰って来たら、この農夫たちをどうするだろうか。」41 彼らは言った。「その悪人どもをひどい目に遭わせて殺し、ぶどう園は、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに貸すにちがいない。」42 イエスは言われた。「聖書にこう書いてあるのを、まだ読んだことがないのか。」

『家を建てる者の捨てた石、

これが隅の親石となった。

これは、主がなさったことで、

わたしたちの目には不思議に見える。』

43 だから、言うておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる。44 この石の上に落ちる者は打ち砕かれ、この石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう。」

45 祭司長たちやファリサイ派の人々はこのたとえを聞いて、イエスが自分たちのことを言うておられると気づき、46 イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者だと思っていたからである。

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

マタイ21、22章にまたがり3つ続く譬え(二人の息子、ぶどう園と農夫、婚宴)は、並べて考え、また福音書の場面の文脈から読むと、共通するテーマが見られます。43節のこぼす言えは「取り上げられ、(別の者に)与えられる」ことになるということです。自分たちこそ所有し、受け継ぐ権利を持っていると慢心している者はそれを受け継ぐことができず、権利などないと思われ除外されている他の者(41節ではほかの農夫)に与えられるというのです。

「ぶどう園と農夫」のたとえと呼ばれるこの話は、譬えの中では寓喩的に読み解かれて来ました。旧約においてぶどう園は神の民イスラエルを象徴し、主人は神を象徴すると想像されました。イザヤ書5章の「ぶどう園の歌」を思い起こす人びともあったでしょう。農夫たちは民の指導者たち、主人の僕たちは旧約の預言者たちを思い起こさせます。この話は旧約のイスラエルが神の声に背き続け、国が滅びた歴史をも想起させられます。歴代誌下24章には、ユダの王ヨアシュの時代、祭司ヨヤダと共に神殿修復に取り組むも、ヨヤダの死後に王は別の家臣たちや神々に心移り、ヨヤダの息子ゼカルヤが神の霊を受けて民の前に立ち「神はこう言われる。『なぜあなたたちは主の戒めを破るのか。あなたたちは栄えない。あなたたちが主を捨てたから、主もあなたたちを捨てる。』」と唱えましたが、ゼカルヤは王の命により神殿の庭で、石で打ち殺されたという記事が記されています。マタイはイエスが律法学者とファリサイ派を批判した言葉としてこの出来事に23:35でも触れています。

跡取り息子は神の子イエスを象徴すると見なして、教会はこの譬えを寓喩的に読み、神の民としての救いの約束はユダヤ人から取り上げられ、キリスト者と教会たちに与えられたと語ってきました。人びとによって排斥され、十字架にかけられて殺されたイエスは旧約に印象深く出てくる「隅の親石」だと見なされました。詩編118:24、イザヤ書8:14、ダニエル2:34,44-45には、不思議な石について語られます。福音書も、パウロ(ロマ9:33)や使徒たちの手紙(1ペト2:7,8)にも繰り返されて、イエスの十字架と死から命への逆転(復活)を解釈する鍵として語られています。

マタイ福音書の時代はユダヤ教徒たちから排斥され会堂から追い出される苦難を受けたキリスト者たちへの励ましと、紀元70年にローマによりエルサレムも滅ぼされ自治を奪われたユダヤの悲劇を想起させるものでもありました。しかし、この譬えからも読み込み、イエスを殺した責任をユダヤ人に全面的に負わせることで、ユダヤ人への憎悪をその後も増幅させ、排斥、攻撃してきた2000年の負の歴史をキリスト教会は真摯に省みて悔い改めねばなりません。

イエスの譬えが暴力に満ちた世界を暴きます。神のものであったはずの土地が占有され、労働者が搾取され、貧富の差が拡大するという暴力。それに対する抵抗が敵意を増大させ、暴力や殺戮が広がるぶどう園。それを制するのはさらに強大な権力や軍備なのでしょうか。そのような解決を求める者たちは、見捨てて見落としている隅の親石につまずく、とイエスは言われました。

# 教会の約束

わたしたちは、神の恵みによってイエス・キリストは主であると信じ、告白してバプテスマを受け、この教会の一員に加えられましたので、聖霊の助けによってこの約束をいたします。

わたしたちは、この教会が人によってではなく神によってできたものと信じ、主の日の礼拝、教会の定めた集会に参加し、教会がきよくなるよう、一致するよう、栄えるように祈ります。またバプテスマと聖餐の二つの礼典、そして聖書の教えと教会の定めた秩序とを守ります。

わたしたちは、この教会を支え、また世界に福音を伝え、神のみ心が広く行われるために進んで必要なものをささげます。

わたしたちは、主にある兄弟姉妹として愛しあい、互いの喜びと悲しみを共にいたします。

わたしたちは、ひとりで祈ることや家族と共に祈る生活を大切にし、わたしたちが預かった子どもたちを神に喜ばれるものになるように教え育て、またまことの心と正しい行いとすべての人を愛することによって、人びとを救い主に導くよう心掛け、主と再び会う時まで、この約束を固く守ります。

わたしたちは、どこにあってもこの約束の精神と神の言葉の真理が実行される教会に加わることを約束いたします。

日本バプテスト同盟 関東学院教会

## 「教会の約束」について

「教会の約束」と言われるこの言葉は、Church Covenant と言い、本来は教会契約と訳されるべきものです。

バプテスト教会の一番の特徴はこの「契約」を結ぶということにあると言われます。17世紀にイギリスに発足した初期のバプテスト教会は、ただ信仰を告白しバプテスマを受けた信仰者の集まりとしてではなく、「契約共同体」として教会形成がなされました。

契約とは、第一に神と教会員の、第二に教会員相互に交わされる二重の構造を持ちます。教会の一員になるとは、神との、そして信徒相互の契約のパートナーになるのだという自覚と責任をもって集まっていたのでした。

一つの教会が各自で教会の契約を結ぶゆえに、各個教会が尊重されるのです。そういう意味で「教会の約束」はバプテスト教会の本質的で重要な意味を持っています。

本来ならば関東学院教会固有の「教会契約」があるのが望ましいですが、教会では、日本バプテスト同盟に連なる教会が多く採用してきた約束の言葉を採用してきました。この「教会の約束」の本文は2009年改訂新版の日本バプテスト同盟「信徒の手引き」にある口語文の言葉です。かつて関東学院教会で唱えられていた文章は文語体でしたが、このたび聖餐式の中で唱和することを再開するにあたり、同内容の口語文を採用いたします。

聖書では、神はイスラエルと契約を結ばれた方であると証言しています。そしてイエスの十字架と復活は、神とわたしたちの新しい契約です。神は罪ある人を愛し、赦し、救い出して新たに生かしてくださいます。

約束してくださる神に支えられ促されて、わたしたちも神と、そして人々と、愛と赦しの関係に生きるというこの教会の約束を心から唱和し、その道に歩みたいと心から願います。